

天声人語

日米が開戦した1941年12月8日、後に社会学者となる日高六郎さんは大学生だった。繰り上げ卒業、そして召集という運命が目前に迫り、学生たちには落ち着かない空気が流れていた。しかし教授たちの反応は違った▼はつきりけりがついて、さばさばした。暗雲低迷が晴れわたった――。そんな会話を日高さんは耳にしたという。長引く日米交渉が人々をいらだたせていた。和戦どちらでもいいから「早く決着をつけてくれ」という気分だったのだ」と著書で述べている▼先日101歳で他界した日高さんは、ベトナム反戦や水俣病に関わる行動派知識人だった。敗戦を機にもたらされた戦後民主主義の体現者とも見られていた。しかしというべきか、だからというべきか、日本に民主主義と平和主義がどこまで根づくのか、疑いつつ問い続けた▼民主化が戦前を引きずりながら進んだことを問題視した。しばらく政治犯を閉じ込めたままだったこと、戦争に協力した新聞が題号も変えずに残ったこと……。憲法の平和主義も「民主化がほとんど根づいていない土壌の上に立てられた一本の旗」と風化を危惧した▼「五年、一〇年で日本がらっと変わる国だ」ということを、みんな、考えていない。僕は年寄りだから大丈夫だけど、あなたは危ない」。10年ほど前、作家の黒川創さんのインタビューで語っている。社会全体の空気がおかしくなっているようにだと▼杞憂にすぎない。雲の上の日高さんに、胸を張って言えるだろうか。